

精神・医学・宗教性

臨床に纏綿する救済

小林聡幸編

大塚公一郎，小島秀吾，小林聡幸，
佐藤晋爾，野間俊一，深尾憲二郎，
森口眞衣著

書肆心水，四六判 284 頁，3,960 円，2025 年 1 月刊

(放送大学名誉教授) 瀧口俊子

大学病院精神神経科から心理臨床をスタートして、長年の臨床を通して「宗教性」に関心を抱くに至った私は、本書の出版を、ここから嬉しく想っている。

編者の小林氏によると、「日本精神神経学会，日本精神病理学会，多文化間精神医学会において宗教のシンポジウムをシリーズで企画」されてきたとのことであり，私たちも日本心理臨床学会，スピリチュアルケア学会で宗教性をめぐるシンポジウムを数年にわたって実施し，書籍を出版して考え合っているのです，本書の書評の機会を感謝している。

また著者の一人の佐藤氏が，神田橋條治先生と瀧口との対談『不確かさの中を—私の心理療法を求めて』を引用してくださったことにも，感激した。

本書は，Ⅰ：進化心理学からみた宗教という観点を紹介するとともに，スピリチュアリティの出自を

関連諸学問の知見から整理する「宗教と精神医学」

Ⅱ：いくつかの精神疾患を取り上げ，それらのなかに浸透した宗教の有り様を描き出す「精神疾患に浸透する宗教」

Ⅲ：治療的な営みのなかでの宗教性を考える「精神療法が要請する宗教性」

の3部から構成され，小林聡幸，森口眞衣，深尾憲二郎，小島秀吾，野間俊一，佐藤晋爾，大塚公一郎氏ら，新進気鋭の7名が執筆しておられる。

編者の小林氏は，「真摯に宗教と言う現象に向かい合って，プロもコントラも自由に論議すべきではないか」と提案され，

「はじめに 宗教と『こころ』——祈りもなく，救いもなく」

「科学が腑分けする宗教する『こころ』」

「統合失調症で宗教はどう機能するか」

「スクリーピュロシティ——強迫症における宗教・宗教性」

「臨床家はスピリチュアリティとどう向き合うべきか」

「あとがき——救いと祈りと」

を，執筆しておられる。

臨床精神医学・精神病理学・病跡学で著名な，音楽にも造詣の深い小林氏の，宗教・宗教性への真摯な取り組みに感銘を覚える。

この書評を2025年4月に私はワープロで執筆しているが，「生成AIが書いたなら？」と想い浮かべる。AIの今後を予測することができないが，どんなにAIが進化しても「宗教性」の重要性は増すばかり，と考える。特定の「宗教」や「宗教団体」ではなく，私が重視しているのは，誰のころにも内在する「宗教性」，概念ではなく実態としての「スピリチュアリティ」である。

なお，本書の「はじめに」で紹介されている，精神科的ケアと宗教の交流地点として活動してきた「日本祈りと救いの臨床」学会（榎本稔理事長）は，2024年末をもって発展的に解散した。

激動の今日，人類にとって重要な「精神・医学・宗教性」について想い巡らす本書は，極めて意義深い。サイエンスの医学界で「宗教精神病理学」を提唱しておられる小林聡幸氏に，ここからの敬意を表し，いっそうのご活躍を期待している。